

## アメリカ公立学校制度における特殊学級（学校）の成立 — 特殊学級（学校）対象の明確化と州法の規定を中心に —

### The Establishment of Special Classes (Schools) in Public School Systems in the United States during the First Quarter of the 20th Century : State Laws and Eligibility.

安 藤 房 治\*

Fusaji ANDŌ

#### 論文要旨

本小論では、アメリカ合衆国の20世紀初頭四半世紀において、公立学校制度内に特殊学級（学校）が成立、発展する歴史的過程を分析した。特に、精神薄弱特殊学級組織化の論理、中・重度精神薄弱児問題が顕在化し、彼らが特殊学級（学校）対象から排除され、その結果特殊学級（学校）対象が明確化される過程、さらには特殊学級（学校）が州法によりいかに規定されていたかを明らかにすることを目的とした。

精神薄弱児を初めとした「問題児」に教育機会を保障する立場、および精神薄弱児のための独自の学級（学校）を組織する論理を明らかにした。このような論理（立場）は、重度児も含めた教育保障の立場に立てないという歴史的制約もあり、公立学校制度から中・重度児を排除する方向に加担した。中・重度児をその対象から除外しつつ、公立学校内特殊学級（学校）は制度的に発展し、四半世紀の間にいくつかの州法でも規定されるようになった。

キーワード：アメリカ合衆国，特殊学級（学校），20世紀初頭

#### はじめに

本小論は、アメリカ合衆国の公立学校制度における特殊学級制度の成立過程、特に20世紀初頭の四半世紀に、「精神薄弱特殊学級（学校）」を中心に、「白痴（idiot）・痴愚（imbecile）」など中・重度精神薄弱児が特殊学級（学校）対象から排除され、特殊学級（学校）対象が明確化される過程および特殊学級（学校）が州法によっていかに規定されていたかについて明らかにすることを目的とする。

すでに、中村満紀男（1992, 1993a, 1993b）は、アメリカ合衆国特殊学級成立・発展史に関するわが国およびアメリカ合衆国の研究を概括し、「世紀転換期アメリカ公立学校制度における精神薄弱特殊学級（学校）の成立とその意義について」明らかにしている。中村によれば、精神薄弱特殊学級は、学業・規律・健康等の標準から逸脱した児童や成人を含む教育機関としての広義の特殊学級の展開の中で成立したという。このようにとらえた上で中村は、広義の特殊学級から精神薄弱学級が分化する過程、精神薄弱特殊学級と聾、盲など他の種別の特殊学級の比

\* 弘前大学教育学部心身障害学科教室

Department of Education for Handicapped Children, Faculty of Education, Hirosaki University

較およびこれら特殊学級設置が公立学校改革といかなる関連があったか、またいかなる教育的、社会的意味があったのかを明らかにした。

本研究では、これら特殊学級が成立、発展する中で、中・重度精神薄弱児問題が顕在化し、彼らが特殊学級対象から排除され、その結果特殊学級対象が明確化される過程、さらには特殊学級が州法によりどのように規定されていたかを明らかにする。

なお、文中の用語には、現在では死語となっていたり、差別感・不快感を助長させる恐れのあるものもあるが、歴史的語句として使用し、初出時に原語を付した。

### 1) 公立学校制度内特殊学級（学校）の開設

義務就学法の制定と強化により、19世紀後半から、公立学校は「すべての」子どもが就学することになった<sup>1)</sup>。義務就学法の強化によって、多くの問題児が公立学校に就学するようになったがこれらの子どもたちは通常の学級での通常の教育課程による指導に従うことができないために通常学級から排除されることとなった。排除されたグループの中の第一は身体障害児、すなわち聾、盲、肢体不自由、第二は怠惰(truant)と非行(incorrigible)、第三は低能(mentally subnormal)と精神薄弱(feeble-minded)であった(Rogers, A.C. 1907,469)。

公立学校制度における聾学校(学級)は、1880年代以降各地の公立学校制度に開設され、盲学級は1900年代以降新たに開設された(中村。1993a)。肢体不自由児の教育は、整形外科の発展を背景にして、民間団体による病院内での教育を基盤として公立学校制度に段階的に移行していく点に特徴があった(中村。1993a)。また、「いくつかの都市で、私的なものから公的責任へと徐々に移行していった」とも言われている(Solenberger, E.R. 1918, 8)。最初の公立学校内の肢体不自由児学級は1890年にシカゴで開設された。同様の学級はニューヨークで1906年、デトロイトで1910年、クリーブランドで1910年、フィラデルフィアとボルチモアで1913年に開設された(Solenberger, E.R. 1918, 8)。病院内学級の例、私立収容施設への公立学校教師の派遣(Solenberger, E.R. 1918, 8)なども試みられた。

次に、精神薄弱特殊学級(学校)が公立学校制度に設置された経過を、初期に開設されたプロビデンスとボストンを例にして見てみる。

ロードアイランド(Rhode Island)州プロビデンス(Providence)が合衆国で問題児のための公立学校を設置した最初の都市であった(Legarde, E.1903-04,36)。同市は1893年に怠惰児および懲戒児(disciplinary)のための学校(6学級)を設置した(Provision for Exceptional Children in Public Schools.12)。プロビデンスの学校は「普通児から犯罪児(delinquent children)を切り離す運動の一部」であった(Johnstone, E.R.486)。正規の学校(regular schools)から、乱暴な(disorderly)生徒が懲戒学校(disciplinary schools)に送られた後、比較的利益を得ていなかった学業不振、あるいは精神欠陥(mentally deficient)児たちが残った。これらの「ひ弱(feeble)でとぼと歩くような(plodding)子どもたち」にとって、「学校の生徒たちの大部分を占める賢く、健康的で、いたづら好きな少年たちの発達に必要な訓練(discipline)、指導(instruction)および体操(physical exercises)は、不適切であることは明白であった」(Esten, R.A.1900/1901,12)。このようなことから、1896年12月、特別な学校(a special school)が、「これらの生徒たちへのより良い治療(treatment)のために」市内に開設された。ここには15名の生徒が、初等学校から選ばれた教師の指導の下に入れられた。1897年

に二校目、1898年に三校目が開設され、翌年四校目が開設された（Esten, R.A.1900/1901,12）。このように、プロビデンスの場合は、問題児のための特殊学校の中から精神薄弱特殊学級（学校）が分化、開設された。

マサチューセッツ（Massachusetts）州ボストン（Boston）の公立学校に「学業不振または精神薄弱児（backward or feeble-minded children）」のための学級設置の準備は、教育長シーヴァー（Seaver）の下で始まった。彼は、学校委員会の承認に基づき、1898年秋に一人の教師を雇った（Lincoln, D.F.1902/03,84）。教育長は、この教員に対して、数百の学業不振（backwardness）の事例のリストを示した。2、3ヶ月間慎重に検討した後、彼女はこれらのケースの中から、彼女が1899年1月開設予定の学級の対象として緊急な15例を選んだ。徐々に発展して学級数は7学級になった（Lincoln, D.F.1909/10,89）。この学級（学校）は学業不振児と精神薄弱児を対象として開設されたが、実態は移民の子弟が多くを占め、精神薄弱はわずかであった<sup>2)</sup>。

このような特殊学級（学校）はプロビデンス、ボストンに続き、スプリングフィールド（1898年、マサチューセッツ州）、フィラデルフィア（1899年、ペンシルバニア州）に設置された。クリーブランド（オハイオ州）は1905年に4学級を設置し、ポートランド（メイン州）は1906年に1学級設置した（Provision for Exceptional Children in Public Schools,12）。

## 2) 精神薄弱特殊学級（学校）開設の論理

これらの子どもたちを公立学校制度から排除するのではなく、特殊学級（学校）を設けて対応するには積極的な理由づけ、公立学校制度を維持する納税者を納得させる理由が必要であった。まず、これらの子どもたちに対する教育の必要性に関する議論について紹介する。

その第一は、近代的な平等観に基づく、教育機会均等論の立場からの意見である。たとえば、「すべての子どもがコモンスクール教育（common school education）を受ける権利をもっていう原理以上にアメリカ国民に完全に理解されている原理はおそらくない。利益を受けるすべての児童に開かれており、全国同一の方法と標準によって管理されている公立学校は、知的、道徳的発達のために学校に送られてきた子どもたちにおけるおおよその能力を決定するための大きな手形交換所（clearing house）になる機会を与える。」（Rogers, A.C.1907,471）。「すべての子どもはニーズと能力に合った教育を受ける権利を持っている。」（Fernald, W.E.1903/04,33）。

第二は、教育することによって結果的に社会の経済的負担が軽減するという経済的効率性の立場からの意見であった。たとえば、ボストン（マサチューセッツ州）のリンカーン（Lincoln, D.F.）は「500名の小学校で、ほとんど呼吸できない、アデノイドで呼吸が停止しそうな子どもが様々なクラスに12人いることがある調査で判明した。もちろん彼らは落第した。多くが視覚障害を有している。彼らの多くは適切な措置により援助できる。他の児童は栄養不良に冒されている。もし世話を受けなかったら、これらの児童の多くは将来社会の重荷になるだろう。彼らは精神薄弱の収容保護施設（asylum）に収容されるか、もしくは被救済貧民か犯罪者にでもなるだろう。州は何らかの方法で彼らを世話しなければならないだろう。彼らを後に刑罰施設で処遇するよりも今世話する方がより安上がりでかなり効果的であることを、社会に対してより多く啓蒙する必要がある。」（Lincoln, D.F.1902/03,91.）と述べている。また、全米精神衛生委員会（The National Committee for Mental Hygiene）精神欠陥部門主任（Director, Division

on Mental Deficiency) ヘインズは「私たちが精神的障害児を放棄することは彼らにサービスを与え、幸福にできないばかりか、裁判所や刑務所、救貧院や他の慈善施設において多額の費用を費やすことになる。」(Haines, T.H.1924,911)と主張している。また、特殊学級を設置しているある幼稚園長は「公立学校体制に組み込まれた特殊学級は、子どもの知的能力を増大させることによって、また子どもたちに利益を与え、有用にする道を開くことによって家庭と社会の負担をより少なくすることによって、我々の子どもの発達のために多くのことをなすことができる。」(Rogers, A.C.1907,474)と述べている。

第三は社会防衛論の立場からの意見であった。たとえば、先に上げた特殊学級を設置している幼稚園長は「街頭をさまよって、社会の脅威となっているだろう。そして、いつかは彼らの子孫が公費で保護されなければならないだろうというのはただ時間の問題だ。」(Rogers, A.C., 474-475.)と述べている。

次に、これら子どもたちの教育を通常学級ではなく、分離された学級(学校)で与えるという場合の論理はどのようなものであろう。

まず第一は、これら子どもたちから通常学級の子どもたちを守るという意見である。連邦教育局長官クラクストン(P.P.Claxton)は「長年、学校当局者たちは、通常学級にこのような子どもたちが入っていることは特異児(the exceptional)と非特異児(the non-exceptional)の両者にとって害悪であることが分かっている」(Provision for Exceptional Children in Public Schools. 5)と述べ、またヴァインランド・トレーニング・スクール校長のジョンストンは「正常児がこれらの障害児から困惑され、妨害されてはならないという理由があれば、彼らは通常学級から隔離され、欠陥児(defective children)の学級に措置されるべきであろう。」(Johnstone, E.R.,486)と述べている。

また、ゴダードは、つぎのように述べている。

「第一に、彼らは通常学級から移動させられなければならない。これらの子どもたち1人は4人の正常な子どもたちと同じ位の教師の時間をたやすく使うだろう。一方彼は学校の他の全部の子どもたちと同じ位の妨害と心労を引き起こすだろう。実際、一人のこのような学業不振(backward)あるいは欠陥児1人の代わりに5人の正常な、賢い子どもたちを喜んで世話しないような教師を見いださないだろう。これらの子どもたちは通常学級から出され、グループ化され、彼らを理解し、彼らの特性に応じて扱う訓練を受けた特別な教師が用意されなければならない。500人の子どもたちのいる学校システムが特殊学級を有しないということはあり得ない。」(Goddard, H.1910,243)

第二は、特殊学級が障害の診断や障害原因の解明に貢献する機能を持つという位置づけである。たとえばロジャースは、特殊学級の機能として、「(1)事例の深い診断、(2)不適切な者を排除し、必要な場合、医学的衛生的援助を確保すること、(3)学業不振児に機会を与えること、(4)原因解明に役立つ状態に関するデータの収集」(Rogers, A.C.,472-473)を上げ、チャニングは「もし、私たちが人類の病的変質をより良く理解し、予防しようと望むならば、異常な発達をしている子どもたちを教育するあらゆる努力をすべきである。そして精神薄弱のための学校の中の特級学級がこの結果を達成する手助けとなるだろう。というのは、必然的にすべての学齢児の大部分の注意深い調査にもつながる」「子どもたちの健康診断カードの作成などに結びつく」(Channing, W.1900,44)とし、障害児だけでなく子ども全体の役に立つことを強調した。

最後に、これら子どもたちの教育は収容施設において保障するよりも、公立通学制学校で

の教育が有利であることについてのいくつかの意見を紹介する。マサチューセッツ州の精神薄弱学校（The Massachusetts School for the Feeble-minded at Waltham）校長であったファernald（Fernald）は「現在のアメリカの収容施設での精神薄弱児の指導の機会があるにもかかわらず、我が国のより規模の大きい都市の公立学校内での特殊学級の組織化を正当化する一定の理由がある。」として、第一に収容施設が年齢の早い時期に親子関係を奪う問題を上げている。彼は「傷つきやすい年代の子どもを見知らぬ人に世話をしてもらうために家庭から遠く離れた収容施設に送ることは子どもと親たちにとって大きな苦勞である。収容施設で得られる利益にかかわらず、子どもはノーマルな家庭生活、母親からの道徳的、社会的影響、地域社会との全体的な関係を奪われる。」とし、「もしこのような学級が利用できれば、一般的に生徒はもっと早い時期から特別な指導を受けるだろう。」と述べ、特殊学級への期待を表明している（Fernald, W.E.1903/04,33）。

ニューヨークで特殊学級開設に尽力したファレル（Farrell）は「通常学校の一部としてこの学級を置くことによって、私たちは学級の子どもに付けられるかも知れないスティグマを避けるし、混合学年学級（ungraded class）の子どもたちと他の子どもたちとの最も望ましい関係を得る。」（Farrell, E.E.1908-09,94）とし、特殊学級の方がスティグマを付けられる恐れが少ないことをメリットとして上げた。フィッツ（Fitts）は、特殊学級の役割について次のようにまとめている。

「特殊学級は問題を解決する試みの第一のステップであることが一般的に信じられている。その役割の第一は、地域社会と通常の子どもたちの教師に対して現状理解の教育すること、第二は精神薄弱（feeble-minded）の子どもたちを見付け出し援助すること、そうすることによって遅滞していた普通の子どもたちを援助すること、第三はエネルギーの30%を少数の精神薄弱に与えている教師の負担を軽減すること。第5（ママ）は社会に対する公正を確保すること。というのは精神薄弱ができる限り理解され、訓練されることが社会的公正の問題であるからだ。」（Fitts, A.M.1915/16,78）<sup>3)</sup>

### 3) 公立学校対象の明確化と中・重度児の排除

アメリカで初期に設置された特殊学級（学校）は、学業不振児や怠学児、精神薄弱児など通常の課業についていけない子どもたち、他の多くの子どもたちへの被害を防ぐために構想された。「いくつかの都市では特殊学級（学校）はあらゆる教育的不適合および社会的やっかい者のごみすて場を形成している。すなわち教育学的に遅れている正常児、学業不振児（mentally or pedagogically backward pupils）、魯鈍（morons）、痴愚（imbeciles）、軽度白痴（high-grade idiots）、道徳的痴愚（moral imbeciles）、怠惰（truant or unluly children）、知能は良いが感覚剝奪の児童（弱視、難聴、語盲）、肢体不自由、まひまたは言語障害児、障害が言語上のものである知能の良い外国生まれ児童などである。」（Wallin, J.E.W.1917,64）。ボストンでは、最初に設置された学級だけでなく、2、3の学級では重度者の世話（low-grade care）が負担となっていた。これらのケースは収容保護施設の適格者であり、小学校教員から手放されたケースであった。24名の生徒は特殊学級からウェイバリー（Waverley、収容保護施設）に送られている。これらの学級は「収容保護施設のための一種の手形交換所（clearing house）の役目を果たしている。」（Lincoln, D.F.1909/10,89）と嘆いているように、遅滞の程度が重い子どもが多く

を占めていた。そこで特殊学級は「痴愚や準白痴 (semi-idiot) の世話にそれほど多くの時間を費やすべきでないと思われており、訓練したら通常学級に入ることのできる保障のある子どもが選択されるべきだ」との意見が教員の中から出てきた (Lincoln, D.F.1909/10,89)。ゴダード (Goddard, H.) は、精神遅滞者を次のように分類し、「白痴は決して公立学校に入らない。彼らは余りにも低い。」(Goddard, H.1910,243) として、公立学校対象を明確化しよう主張していた<sup>4)</sup>。

これらの多種多様の障害、程度の異なる障害を持った子どもたちが同一の学級で、同一の課業を課することは不可能に近く、公立学校対象とされる子どもたちの教育対象としての分化、さらに公立学校就学対象外すなわち収容保護施設対象とされる子どもの明確化が求められるのは時間の問題であった。ホフマンによれば、「学校は暗に、あるいは明白に子どもたちの中の「正常」、結果的に同様に偏りを定義しなければならなかった。」(Hoffman, E.1975,416)。

肢体不自由特殊学級からの精神薄弱児の排除もあった。1910年代には、「公立学校内に肢体不自由児学級のおかれているほとんどの都市は一定程度の精神遅滞児を見いだしている」(Solenberger, E.R.1918,27) と言われるように、肢体不自由特殊学級において次第に重複障害児、すなわち精神遅滞を伴う肢体不自由児の教育的処遇上の問題が顕在化し、その解決が求められ始めた。

ニューヨーク市においては1915-16年度に3学級が設けられていた。肢体不自由児学級の特別指導主事は、重複障害児 (doubly handicapped children) のためのこのような学級が公立学校内に置かれること、しかし、教育施設により全く利益を得られないことが明確な子どもたちは適度な試みの後に教育局の監督の下におかれている収容施設に送られるべきであると推奨している。

フィラデルフィアにおいては、肢体不自由児学級を設置している学校の内2校において、一つの学級を構成できる程十分な遅滞児がいらないという理由によって、低能の子どもたちが、非遅滞肢体不自由児たちと共に同一の学級に入れられた。マコール校 (McCall School) では、低能の生徒のいる学級教師が、ニュージャージー州バイナランド施設の養成コースで精神薄弱児指導のため特別な訓練を受けた。(Solenberger, E.R.1918,27-28)

マコール校 (McCall School) では、肢体不自由児のための三教室の内の一つは精神的に正常な第一、第二学年の子どもたちに提供されていた。もう一つの教室は第三学年の子どもたちが使用し、三番目の教室は、程度の低い子どもたちだけがおり、低能児や實際上障害のある子どもたちが含まれた。この学級の教師は精神遅滞生徒の指導のために特別に訓練を受けていた。

ミーデ校 (Meade School) では、二つの肢体不自由児学級のそれぞれが何人かの遅滞児をもった、しかし、一つの教室のほとんどの子どもたちは最初の三学年に含まれていた。二番目の教室では五年の学習をしていた。これらの二学級の45名の中の8、9名はいくらか遅滞していた。(Solenberger, E.R.1918,41-42)

#### 4) 特異児の分化、特殊学級の行政的把握—1911年連邦教育局調査

「問題児」への対応という側面から各地で設置されてきた特殊学級 (学校) が連邦の主導の下で整理し、分化していった契機となったのが1911年に連邦教育局によって実施された調査であった (Provision for Exceptional Children in Public Schools.31-35)。

この調査報告書の前書きにおいて、連邦教育局長官ブレクストン (P.P.Claxton) は、「学校当局者たちは、通常学級にこのような子どもたちが入っていることは特異児 (the exceptional) と非特異児 (the non-exceptional) の両者にとって害悪であることが分かっている」とし、この調査は「これらの子どもが必要としている教育的保護に関して公立学校関係者に示唆を与える」と述べている (p.5)。同長官が、この調査によって、特別な保護を必要としている子どもを10段階に分類していることなどに言及していることから、公立学校が責任をはたすべき特異児を明確にし、それに対する教育的対応策を明確にすることを期待したものと考えられる。

調査を実施したのはヴァン・シッケル (Van Sickle, J.H. マサチューセッツ州スプリングフィールド市教育長)、ウィットナー (Witmer, L. ペンシルバニア大学心理実験・臨床主任)、エアーズ (Ayres, L.P. Russell Sage 財団教育部主任) の三氏であった。

特異児の分類については、「本報告書 (Bulletin) は、子どもの特異性の原因を理解した上で、科学的分類よりも特異児の適切な処遇 (treatment) に関する問題点に関心を持つ人々に対して」(p19) 書かれている。すなわち、これらの分類により教育的対応をも明確にするという連邦教育局の期待に応えようとしたものとなっている。

まず、子ども全体を知的能力の側面から次のように分類している。

英才 (Talented)	.....	4%
優秀 (Bright)	.....	} 92%
普通 (Normal)	.....	
遅進 (Slow)	.....	
精神薄弱 (Feeble-minded)	.....	4%

この中の「精神薄弱」とされている4%は行政的には二グループに分類される。低い方は全学齢児の0・5%を占め、公立学校で見られる最低の精神能力の子どもたちである。彼らは真の (genuinely) 精神欠陥児 (mentally deficient) であり、公立学校では適切には扱うことができない。彼らは収容保護のケースであり、収容保護施設に移されるべきである。残りの3・5%は精神薄弱であるが、公立学校内の特殊学級である程度訓練が与えられ得る (Provision for Exceptional Children in Public Schools, 16)。

「Slow, Backward, Retarded, or Laggard Children」などと呼ばれる「精神薄弱」の上にランキングされているグループは最も多い子どもたちのグループであり、学齢児の10%から50%の部分構成する。精神欠陥者 (mentally deficient) ではないが進歩が遅い子どもたちである。人数や重要性の点から、これらの子どもたちは最大ではないが大きな学校での問題である。」(p.16)

分類する上で最も重要なことは、「公立学校で適切に教育され得ない児童と通常の学級 (day class) で適切に教育・訓練され得る児童の間の差異」であって、調査者たちは「収容保護施設 (institution) ケースと公立学校ケースの間の区分」を一層鮮明にするべきであるとしている。

この区分の設定のために少なくとも三つの基準を上げている。まず第一に、白痴 (idiotic) および痴愚 (imbecile) の子どもたち、道徳的堕落 (degenerate) および怠学 (delinquent) の児童、重度の (severely) 肢体不自由ないしは癲癇をもっている子どもたちの存在である。これらの子どもたちは「同学年の普通児と一緒にすることは不適切」であり、「多くは隔離的な収容保護施設内にあってすら、ただ保護的処遇 (custodial treatment) の対象にすぎない。」

第二の基準は、児童の症状の治療可能性あるいは症状の相対的な安定性という点に関連する。

ある児童は外見上おおむね正常で、精神的特性においてなお退行している。彼ら自身の安全のためにも、さらに彼らが公立学校内で関係を持つ子どもたちの安全のためにも彼らが学校から移され、収容保護施設に措置されることが望ましい。彼らの何人かは教育可能でおそらく公立学校で訓練され得る、しかし彼らが彼らがそのように処遇されることは不適切である。道徳的痴愚 (moral imbecile) の最も危険なタイプがこのクラスにはやってくる。これらの児童が道徳的感化の危険および彼らの特性を伝染させる可能性をもって正常児の間で生活しないようにするために、これらの児童を特別な収容施設に隔離するための法的な保障を得るために学校当局は助力すべきである。

第三の基準は公立学校と収容施設での処遇に対する受け入れ易さである。児童の全生活時間―睡眠時や覚醒時―をコントロールする収容施設は公立学校（学級）で教育するよりも、困難なケースのためにより効果的な訓練を与えることができるということは道理がある。(p19-20)

報告書は、公立学校対象と収容施設対象との分類基準を設定した上、具体例として次のように提示している (p21-22)。

収容保護のケース（公立学校当局の監督と保護から除外されるべきケース）

1. 非道徳児 (Morally insane children)
2. 暴力的児童 (Violently insane children)
3. 痴呆児童 (Demented children)
4. 中程度痴愚以下の全精神薄弱児 (Barr の分類による)
5. 程度が高い道徳的痴愚 (High-grade moral imbeciles)
6. 重症癲癇 (Severe cases of epilepsy)
7. 伝染性疾患のケース（一時的あるいは長期的）
8. 重度肢体不自由児 (Children helplessly crippled) もしくは人を不快にさせる奇形 (suffering from revolting physical deformity)

公立学校における特殊学級措置児童もしくは特別な指導を受ける児童

1. 外国人
2. 過年入学 (Late entering)
3. 学業不振 (Backward) であるがノーマルな段階に急速に回復が可能
4. 鈍感で低能 (Dull and feebly gifted)
5. 職業訓練が必要な児童 (Children requiring vocational training)
6. 身体的早熟、とくに性的早熟児童 (Children of precocious physical development, especially of precocious sex development)
7. 英才児 (Exceptionally gifted or able children)
8. 進歩を妨げ、一時的あるいは恒久的に学年への適応を困難にする種々の身体的欠陥を持つ児童
9. 言語に問題あるケース (Speech cases)
10. 社会的な問題を持つケース；遅滞の原因が主として、特殊教育教師と同様、社会的訪問サービスを必要とするような家庭環境にあるもの。



不明確な区分の児童（収容保護あるいは特別なケース）

1. 盲および準盲 (Blind and semi-Blind)
2. 聾および準聾 (Deaf and semi-deaf)
3. 長期欠席を含む怠学 (Delinquents, including persistent truants)
4. 程度の高い痴愚 (High-grade imbeciles) (Barr の分類参照)
5. 程度の高い痴愚より程度の高いすべての精神薄弱児 (All feeble-minded children of higher grade than high grade inbeciles)
6. 肢体不自由児 (Crippled children)
7. 軽症の癲癇を持つ児童あるいは神経または通常の学級の一員となることを困難もしくは不適切にするような他の疾患を持つ児童

次に、これらの特異児のための特殊学級（学校）の状況についての調査結果について述べる。調査は、全米の都市教育長を対象に、調査用紙を送付し、回収するという方法で実施された。調査用紙は1,285都市に送付され、898都市から回答があった。調査用紙の内容は、「怠学 (Delinquent)」「学業不振 (Backward)」「欠陥 (Defective)」「盲あるいは準盲 (Blind or semibind)」など14種類の名称を例示し、それに該当する学級が設置されているか否かを問う形式であり、学級の実態を調査するものとはなっていなかった。中村（1993）が指摘するように、この調査では「全国的な実態把握は十分に行われなかった」（p56）のであるが、この調査は、「特殊教育のすべてのタイプを包含した最初の重要な統計的研究」（Public School Education of Atypical Children.1931, 3.）とされており、この時期の特殊学級（学校）の全米的な設置状況については知ることができる。

結果は次の通りであった。

道徳的特異児 (mollally exceptional children) のための教育施設設置都市

地 域	怠学, 非行児学級	寄宿制学校	計	設置率 (%)
大西洋岸北部	59	10	69	19
大西洋岸南部	7	1	8	13
中南部	10	1	11	12
中北部	39	5	44	14
西部	13	7	20	36
計	128	24	152	17

精神的特異児 (the mentally exceptional) のための教育施設設置都市

地 域	低能児学級	遅進児学級	英才児学級	計	設置率
大西洋岸北部	44 (12)	97 (26)	22 ( 6)	163	44
大西洋岸南部	3 ( 5)	15 (25)	2 ( 3)	20	33
中南部	7 ( 8)	18 (20)	3 ( 3)	28	31
中北部	32 (10)	70 (22)	19 ( 6)	121	38
西部	13 (23)	20 (36)	8 (14)	41	73
計 (平均)	99 (11)	220 (25)	54 ( 6)	373	42

## 身体的特異児 (the physically exceptional) のための教育施設設置都市

地 域	盲学級	聾学級	啞学級	吃音学級	開窓学級	肢体不自由学級	計
大西洋岸北部	4	6	—	1	12	1	24
大西洋岸南部	—	—	—	—	1	—	1
中南部	—	—	—	—	1	—	1
中北部	9	34	—	1	9	2	55
西部	1	6	1	—	2	—	10
計	14	46	1	2	25	3	91

## 環境的特異児 (the environmentally exceptional) のための教育施設設置都市

地 域	非英語 (昼間)	非英語 (夜間)	入学遅れ	特殊	計	設置率
大西洋岸北部	41	122	26	—	189	51
大西洋岸南部	1	4	6	1	12	20
中南部	4	8	7	—	19	21
中北部	16	53	27	—	96	29
西部	11	10	9	—	30	54
計	73	197	75	1	346	39

## 5) 特殊学級に関する州法規定

以上のような特殊学級設置は各都市の自治に委ねられ、州レベルでこれらの学級設置を裏付ける法整備は遅れていた。

1911年、New Jersey は、聾、盲、および教育的遅滞者のための特殊 (教育) 学級強制法を通過させた最初の州であった (New Jersey Commission, 1965, In Sigmon, Scott B, 4) が、必ずしもすべての州がニュー・ジャージー州に引き続き特殊学級設置法を設け、しかも設置を義務化した訳ではなかった。

カリフォルニア州の特殊学級 (学校) に関する規定は次の通りであった (Haines. 1925, 530—531)。

「すべての市学区教育委員会 (the board of education) は、市教育長 (the city superintendent of schools) の勧告の下において、もしくは、すべての小学校区学校理事会 (the board of school trustees) は、郡教育長の勧告の下において、小学校のために作成されている通常教育課程以外の教育課程から利益を得る生徒のために、一学級以上の分離学級を設置し、維持してもよい (may)。通常教育課程に代えて、在籍生徒の精神的ニーズに適合した、校長の承認を受けた他の学習活動を与えてもよい。」 (June 3, 1921)

コネチカット州は「州教育委員会委員長の明確な承認なしに、教育上、特異児は学校に通学する特権を剥奪されてはならない。締め出されたすべての子どもは適切な保護と訓練を保障するためにただちに適切な当局者の注視の下におくべきである。」とし、特殊学校については以下のように規定していた (Haines. 1925, 531)。

「いずれかの視学委員会 (board of school visitors)、タウン学校委員会 (school committee)、あるいは教育委員会は教育上の特異児に特別な指導を与えるべきである。二つ以

上の学区が結束してこのような指導を与えてもよい。学区内に居住する教育上の特異児の10人以上の親と後見人の陳情、州教育委員会の承認を受けた陳情に基づき、視学委員会、タウン学校委員会、あるいは教育委員会はいわゆる教育上の特異児のための学校を設立すべきであり、または他の何らかの方法で指導を行うべきである。」(June 24, 1921)

この当時の、各州の特殊学級に関する規定の全般的状況は次のようであった (Haines. 1925, 534-535)。

「1. 成文規定を持つこれらの州のすべてが、公立学校内にいくつかの特殊学級を持っている。しかしながら、命令には十分従っているとは言えない。州法が特殊学級の設置を要求している多くの学区において設置されていない。

2. 7才から15才の子どもで特殊学級に通学している比率が低い州のいくつかは、このような特殊学級の設置のための州法による明確な規定を持っている。ルイジアナ、ユタ、ミズーリおよびウイスコンシン州がそれらの例である。

3. 特殊学級の設置比率が高い州のいくつかは、この問題での法令上の要件は持っていない。ミシガンとロードアイランドがその例である。」

ヘインズによれば「成文法的許可や要件は、いずれの州でも特殊学級を設置するための必要条件としてはおそらく必要ないけれども、このような法令上の要件は、公立学校内での特殊学級設置の推進力としての役割」を演じていた (Haines, T.H. 1925, 534-535)。

考察された30州の内25州が特異児 (atypical children) のための何らかの規定を有している。これらの州の内5州を除くすべての州の法が小規模学区と同様大規模学区に適用される。例外：アラバマ州は「人口6,000人のすべてのタウンの学校委員会は特殊学級を設置すべきである (shall)」と規定している。

1923年のオレゴンの成文法は「住人10,000人以上の学区の the board of directors は特殊学校を設置する権限が与えられる」と書いている。他方、1929年のオレゴン州法は身体障害者だけに言及しているが、それは「オレゴン州内のすべての学区は身体障害児のための設備を準備すること (一定の条件で)」と要求している。ユタは主要都市に一定の学級を設置することを要求しているが、許可 (permission) は他のすべての地方ユニットに拡大される。この法令は「主要都市 (first class cities) の教育委員会は特殊学校および特殊学級を設けなければならない (shall)、他の学区教育委員会は設置してよい (may)」と書いていた。

ワシントンは低能 (mentally subnormal) に関連する法令を主要な学区に制限していた、すなわち法律は「主要な学区の the board of directors は欠陥児 (defective youth) のための学校を設置し維持する権限を与えられる」と規定していた。しかしながら、他のワシントン州法は parental schools を50,000人以上の都市に限定している。イリノイは人口100,000人以上の都市に parental schools の設置を義務づけ、人口25,000から100,000人の都市に対しては任意設置としていた。

こうして、25州の内5州が法令が適用される学区の規模に関して何らかの制約を設けていた。(Public School Education of Atypical Children. 1931, 7-8)

最後に、特殊学級 (学校) の対象となる精神遅滞あるいは他の特異児の定義はどのようになっていたであろう。成文法による定義は、特殊学級 (学校) での訓練のための志願者として考慮しなければならないほど、子どもたちが重大な問題を抱えているか、あるいは学校での活動において遅滞しているかどうか、あるいは精神的な欠陥があるかどうかを明確にすることを目

的としている。特殊学級への入級のための適切な志願者として子どもたちを選抜するために、ミズーリー州法は「教授の可能性のある精神薄弱児」と明記し、マサチューセッツ州とニューヨーク州の法律は「三年以上の遅滞」との文言を使用し、ニュージャージー州法は「普通より三年以下」との文言を用いていた (Haines, T.H.1925,536-537)。

州法で特殊学級 (学校) の対象を規定している州はこの時点では一部であり、規定している遅滞の程度もまだ厳密ではなく「三年以上の」遅滞と規定されているだけであった。ミズーリー州の「教授の可能性のある精神薄弱児」との対象規定は、教授の可能性の低い中・重度の精神薄弱児を公立学校対象外とする可能性を含む規定として注目したい。

## おわりに

本小論は、今世紀初頭4半世紀において、アメリカ合衆国公立学校制度の中に特殊学級 (学校) が成立する過程を分析することを目的とした。この分析を通して、公立学校制度に設置された「問題児」のための特殊学級 (学校) から精神薄弱特殊学級 (学校) が分化し、成立したことが明らかとなった。さらに、精神薄弱を含む「問題児」に教育を保障する三つの立場と精神薄弱特殊学級 (学校) を組織する論理を明らかにすることができた。特殊学級 (学校) を組織する立場には、中・重度の精神薄弱を含む「すべての子どもたち」の教育を保障するものではなく、学級 (学校) 組織化の後時を経ずして、中・重度の精神薄弱児たちは公立学校対象外として排除された。

公立学校制度内特殊学級 (学校) は、州法での規定も始まり、今世紀初頭四半世紀の内にその制度的骨格は完成した。本研究では制度的枠組みを追跡することに重点を置き、その制度が成立する社会的、歴史的背景の分析には至らなかった。この点については今後の研究課題として残したい。

## (注)

- 1) Cremin (1961) は、「義務就学法はアメリカ教育史においてあらたな時期を画した。肢体不自由、盲、聾、病氣、愚鈍が増大してきた。以前は学校から落ちこぼれていた数千の不従順で救いがたい子どもたちに今や最低限の期間公的責任を持つこととなった。」(Hoffman, E.1975,418) と指摘している。ヘック (Heck, A.O) は、「義務就学法ができるまで、公教育はこのような特殊学校もしくは学級に大きな関心を示さなかった。義務就学法は所定の年齢のすべての子どもたちの就学を強制した；これは教育者たちの注意を、これまで様々な理由で排除されてきた子どもたちのグループに向けさせた」(Hoffman, E.1975,417) と述べた。また、アメリカで最も初期に特殊学級を設けてこれらの問題に対応したプロビデンス市の特殊教育主事は次のように報告している。

「教育が大衆に拡大してくるにつれて、以前は無視され、否定され、見捨てられた社会の下層にまで教育が広まってきている。スピーチ能力を獲得するのが遅い子ども、そして知覚が鈍く、認知力が弱い子ども、筋力や神経が弱い子どもから生来の賢さが自らの教師である子どもまで、その距離は大きくない、しかし、それは日々急速に増大する。」(Esten, R.A.1900/1901,10)

さらに、中村は次のように述べている。

「19世紀前半以降、聾・盲・精神薄弱児は、州が管理する特殊学校で教育の機会があった。就学義務が徹底して実施されていなかった公立学校では、その他の障害児およびその周辺児童による「問題児」問題は成立しなかった。「問題児」が通学しても、公立学校では出席停止が罰として活用され、学業が著しく遅れた児童は放校処分となった。学業や規律に問題がある児童は、注目を受けたり、他児への指導を妨げるほど、学校にはながくとどまらなかった。だが、このような措

置は、就学義務が強化される19世紀末には不可能となる。」(中村, 1993b,54)

- 2) これらの学級（学校）に就学した生徒の内実、数および教育成果は次のようであった (Cheney, F. E.1903-04,39)。5年間で30名の少年と5名の少女が在籍した。1年の最大人数は15人で最少は10名、平均は12名であった。国籍-20名がアイルランド人、6名がアメリカ人、6名がロシア系ユダヤ人、1人がドイツ系ユダヤ人、1人がスウェーデン人、1人がアッシリア人であった。年齢-入学年齢は6才から14才まで様々であった。12人は11才から14才の間であった。在学期間-35名のうち、18名が1年末満の在学であり、17名が2年から5年の在学であった。

11名は明確には精神薄弱ではなかったが、彼らの属する学年の学習よりは絶望的に遅れており、しかし低学年に置くには年齢が進みすぎていた。この11名の中の一人は学校をやめて働いた。残りの10名は進級、6名は学年制小学校に進級し、4名は混合学年制の文法予備校に進級した。小学校に進級した6名は2年から6年まで順調に進んだ。9名は就職し、工場で一日に60セントから1ドル稼いでいる。この9名のうち3名は明確に精神薄弱であり、残りの6名は平均以下の知的能力であった。卒業生で1人だけ無業である。この少年は遅滞の程度が低く (low-grade defective)、ウェイバリー (Waverley) 州立収容施設に入れられるべきだった。3名は行方不明。一人はウェイバリーに送られたが、母親が死亡しており、父親が子どもたちを捨てた (Cheney, F.E.1903-04,39)。

ボストン特殊学級の教育の結果については次のような報告もある。全部で264名が教育を受けた。24名——ウェイバリーに送られた。5名——死亡。15名——私立学校に。36名——公立普通校に再入学。97名——まだ、特殊学級に在籍。87名——16才の年令制限、病気などで退学。(Lincoln, D.F.1909/10,89)

- 3) フィッツ (Fitts) は、特殊学級の役割について、ほとんど同様なことを別の部分でも次のように述べている。

「社会および普通児の教師たちを教育すること。これは特殊学級の教師によってなされなければならない。Miss.Cheney の活動はこの典型。特殊学級での教育のための児童を探し出し、彼らを援助すること。わずかな精神欠陥 (mentally defective) の生徒にエネルギーの大部分を使う小学校教師を救済すること。」(Fitts, A.M.1916/17,94.)

- 4) ゴダードは以下のように精神遅滞者を分類し、白痴を公立学校対象外とするよう主張した。

「(1)全体的に三才未満の発達停止、すなわち二才以下の達成の者。これらは白痴である。

(2)3才から7才の年齢で恒久的に発達停止する程の遅滞の者。これは痴愚である。

(3)7才から12才の年齢で発達停止するほどの遅滞の者。これらは公式には精神薄弱と呼ばれるが、遅滞者全体にも適用される用語でもある。我々はここで彼らを軽愚 (morons) と呼ぶことを提唱する。この語は“fool”のギリシア語である。英語の“fool”は公式に使われているが、正確にこの段階の子ども、判断や感覚で欠陥がある子どもについて記述する。」(Goddard, H. 1910,242)

「子どもの最終的な段階は完全な発達停止が生じた期間に依存する。もし、6才で停止した場合、彼は痴愚である。もし7才から12才の間まで発達し続けるならば、彼は軽愚あるいは程度の高い精神薄弱児になる。彼は非常に多くのことができるように訓練されるが決して正常にはならないし、指示なしに身のまわりのことができるようにはならない。」(Goddard, H.1910,243)

## 文献

- Channing, W.(1900) : Special Classes for Mentally Defective School Children. Journal of Psycho-Asthenics, Vol. 5. No.2, 40-46.
- Cheney, F.E.(1903) : Five Years Experience in Teaching Mentally Defective Children in a Public School. Journal of Psycho-Asthenics, Vol. 8.39-41.
- Esten, R.A.(1901) : Backward Children in the Public Schools. Journal of Psycho-Asthenics, Vol. 5.10-16.
- Farrell, E.E.(1909) : Special Classes in the New York City Schools. Journal of Psycho-Asthenics, Vol.13.91-96.

- Fernald, W.E.(1903) : Mentally Defective Children in the Public Schools. *Journal of Psycho-Asthenics*. Vol. 8 .25-35.
- Fitts, A.M.(1915/1916) : How to Fill the Gap Between the Special Classes and Institutions. *Journal of Psycho-Asthenics*, Vol.20.78-87.
- Fitts, A.M.(1916/1917) : The Function of Special Classes for Mentally Defective Children in the Public Schools. *Journal of Psycho-Asthenics*, Vol.21.94-98.
- Goddard, H.(1910) : What can the Public School do for Subnormal Children? *The Training School*.Vol.VII, No. 5 .
- Johnstone, E.R.(1907) : The Institution as a Laboratory for the Public School. *National Conference of Charities and Correction*, 34, 477-486.
- Haines, T.H.(1924) : Special Training Facilities for Mentally Handicapped Children in the Public Day Schools of the United States, 1922-23. *Mental Hygiene*, Vol.8,893-911.
- Haines, T.H.(1925) : State Laws Relating to Special Classes and Schools for Mentally Handicapped Children in the Public Schools. *Mental Hygiene*, Vol. 9 ,529-555.
- Hoffman, E.(1975) : The American Public School and the Deviant Child : The Origins of Their Involvement. *The Journal of Special Education*, vol. 9 , No.4,415-423.
- Legarde, E.(1903) : Should the Scope of the Public School System Be Broadened to Take in All Children Capable of Education. *Journal of Psycho-Asthenics*, Vol. 8 .
- Lincoln, D.F.(1902) Special Classes for Feeble-Minded Children in the Boston Public Schools. *Journal of Psycho-Asthenics*, Vol. 7 .83-90.
- Lincoln, D.F.(1909/1910) : Special Classes for Mentally Defective Children in the Boston Public Schools. *Journal of Psycho-Asthenics*, Vol.14.89-92.
- 中村満紀男(1992) : 世紀転換期アメリカ公立学校制度における精神薄弱特殊学級(学校)の成立とその意義について(1). 秋田大学教育学部研究紀要・教育科学部門, 43, 77-99.
- 中村満紀男 (1993a) : 世紀転換期アメリカ公立学校制度における精神薄弱特殊学級(学校)の成立とその意義について(2). 秋田大学教育学部研究紀要・教育科学部門, 44, 53-68.
- 中村満紀男 (1993b) : 世紀転換期アメリカ公立学校制度における精神薄弱特殊学級(学校)の成立とその意義について(3). 秋田大学教育学部研究紀要・教育科学部門, 45, 53-81.
- Provision for Exceptional Children in Public Schools. *Bulletin*,1911, No.14.(United States Bureau of Education)
- Rogers, A.C.(1907) : The Relation of the Institutions for Defectives to Public School System. *Proceedings of National Conference of Charities and Correction*, 34,469-477.
- Sigmon, Scott B. : The History and Future of Educational Segregation. *The Journal for Special Educators*, vol.19, No.4,1-15.
- Solenberger, E.R.(1918) : Public School Classses for Crippled Children. *Bulletin*, 1918, No. 10(Department of the Interior Bureau of Education)
- Wallin, J.E.W.(1917) : Problems of Subnormality. World Book Company.

(1996.7.31受理)